
巨人たちの戦争 第2部：対立

伊藤 薫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

巨人たちの戦争 第2部：対立

【Zコード】

N9472W

【作者名】

伊藤 薫

【あらすじ】

「ロシア戦役は2週間で勝利したと言つても過言ではない」緒戦の圧倒的な勝利に、楽観した雰囲気に包まれたドイツ軍。しかし、これはまだ序章に過ぎなかつた。スマレンスク、キエフ、レニングラード・・・緒戦のショックから徐々に立ち直つたソ連軍は死力を尽くして反撃を開始する。本作は、両軍の作戦行動、指導者・将軍たちの思惑に焦点をあて、「独ソ戦」を克明に再現したノンフィクションである。

1941年7月3日、ハルダー参謀総長は日誌にこう記している。「・・・全体としてビアトリスク屈折部の敵軍は取るに足らない兵力を残して撃滅されたと見ることが出来る。北方軍集団前面で12ないし15個師団が壊滅したものと考えても良からう。南方軍集団前面でも敵軍は友軍の攻撃によって寸断され、大部分は壊滅した。すなわち全体としてみると、ドヴィナ・ドニエブル河前面のソ連軍殲滅の使命は達成されたといえるのである。ロシア戦役は二週間で勝利したと言つても過言ではない」

多くの指揮官がハルダーと同様、対ソ戦の先行きを楽観していたが、中央軍集団司令官ボック元帥はソ連軍の潜在能力に対して深い懸念を抱いていた。そして、軍集団の内部では、指揮官どうしの軍の運用に関する対立が感情的なものにまで発展しようとしていた。

ドイツ中央軍集団は7月1日の時点で、ミンスクとドニエブル河の中間を流れるベレジナ河の西岸に、3か所の橋頭堡を築いていた。すなわち、ボブルイスクとスヴィスロチ、そしてモスクワ街道上のボリゾフである。

これらの橋頭堡はすべて第2装甲集団が占領しており、その司令官グデーリアン上級大将は第47装甲軍団の全部隊をボリゾフに派遣することによって、その橋頭堡を拡大しようとえた。だが、第4軍司令官クルーゲ元帥がグデーリアンの出鼻を挫くように、ボリゾフへの前進を禁止する命令を下した（一）。

グデーリアンはしぶしぶ命令を受け入れたが、第17装甲師団（ウェーバー少将）の一部が停止命令を受領せず、ボリゾフへの進撃を継続してしまった。クルーゲはグデーリアンが意図的に命令を無視したと思い込み、グデーリアンを第4軍司令部に呼び出し、厳しい口調で叱責した。

両者の感情的な対立は溝が埋まらないまま、ヒトラーは7月3日

付けで第2・第3装甲集団をクルーゲの直轄指揮下に置くよう命じた。第4軍司令部は「第4装甲軍」としてホトとグデーリアンの両者を統轄する上級司令部となり、第4軍の所属部隊は戦略予備の第2軍（ヴァイクス元帥）に移管された。

この頃になると、ミンスク包囲網で掃討を終えた歩兵部隊と物資を積んだトラックが、先行して装甲師団に追いつくようになっていた。ヒトラーの決定をグデーリアンは当然ながら苦々しく思っていたが、装甲部隊がドニエップル河への東進が再開できる状態にあり、その怒りも次第に収まっていた。しかし、グデーリアンの正面にはボックの懸念が的中するかのように、ソ連軍の新手の機械化部隊が待ち受けていたのである。

7月3日、第18装甲師団司令部に航空偵察の報告が入った。その内容を読んだ司令官ネーリング少将は、衝撃を受けた。

「強力な敵戦車部隊。少なくとも100両の重戦車が、ボリソフ＝オルシャ＝スマレンスク街道の両側を前進中。現在、オルシャ。これまで見かけなかつた重戦車あり」

ボリソフに出現した「これまで見かけなかつた重戦車」とは、すでに北部と南部で姿を現していたT34であった（2）。少数のT34を含む100両以上の戦車を抱える第1モスクワ自動車化狙撃師団（クレイゼル大佐）と第13軍の残存兵から成る機動集団が、ボリソフの橋頭堡を潰そうと反撃に乗り出したのである。しかし、この反撃も戦局を変えるには至らず、2日後には撤退を余儀なくされた。

7月4日、第2装甲集団の南翼を進む第3装甲師団（モーデル中将）はドニエップル河に接するロガチエフに進出し、ドニエップルへの一番乗りを果たした。この知らせを受けたクルーゲは事前に何の相談も無く、部隊を動かす「部下」のグデーリアンへの怒りをせりに募らせる結果となつた。

クルーゲとグデーリアンの間に生じた確執は、今後も作戦方針をめぐつて再燃し、ドイツ中央軍集団全体の動きに影響を与えること

になる（3）。

1・前哨戦（後書き）

(1) 第2装甲集団は「軍」規模の師団を抱えているが、兵站支援は第4軍に依存していた。そのため、第4軍は第2装甲集団の上級司令部となる。

(2) T34は中戦車である。

(3) 両者の対立は1940年の「西方攻勢」のときにも起つっていた。

2・突進

7月4日、ティモシェンコは西部正面軍司令部に姿を現して、自ら2日付けで同軍司令官に就任した（1）。西ドヴィナ河＝ドニエプル河の防衛線に布陣した西部正面軍は戦略予備から第19軍、第20軍、第21軍、第22軍、さらにスモレンスクに構える第16軍が新たに編入された（2）。

しかし、どの部隊も戦車、通信機材、対戦車兵器、高射砲が不足していた。指揮官たちはほとんど毎日、陣地を交代させられた。どの部隊も戦闘準備のために割く時間がなく、バラバラの行動を取るようになつた。そのためソ連軍の協同は稚拙だつた。

クレムリンはドイツ軍のドニエプル河への進出を阻止するため、ベレジナ河上流のレペリからボリソフを経てボブルイスクに至る線で反撃に出るよう、西部正面軍に命じた。

7月6日、第20軍（クロチュキン中将）は第5・第7機械化軍団を先頭に、レペリ近郊で進撃中のドイツ軍の先鋒に対して正面攻撃を仕掛けた。約2千両の旧式の戦車が投入されたが、ドイツ軍は航空支援を受けながらソ連軍の波状攻勢を撃破していった。5日間にわたる激戦の末、ソ連軍は約830両の戦車を失つて東方に撤退した。

この勢いに乘じて、グデーリアンは作戦の第2段階 ドニエプル河の強行渡河に取りかかろうと考えていた。彼は配下の軍団長や師団長と会合を開き、自ら作戦内容を説明して回つた。作戦決行日は、7月11日とされた。

7月9日、トロチンに置かれた第2装甲集団司令部に突然、クルーゲが現われた。そして、グデーリアンに対して「ドニエプル河への渡河は延期する」よう命じると、両者の間で激論が戦わされた。

包围下のソ連軍を完全に殲滅しないまま次の攻勢に出ようとするグデーリアンの戦術をクルーゲは「リスクが大きい」と感じており、

より堅実な用兵術を取るよう迫った。一方、グデーリアンは装甲部隊のスピードこそが必勝のカギであると考えており、クルーゲに食いついた。

「本官は作戦の成功を信じております。ただちにモスクワへ進めば、本年度じゅうにも勝敗は決します」

グデーリアンの弁舌にクルーゲはたじろぎ、「貴官の作戦は常に1本の絹糸にかかっている」と言いながらも、予定よりも1日早い即時決行に許可をされた結果となつた。グデーリアンは幕僚たちに向かつて言った。

「進撃だ、諸君。渡河は明日だ」

7月10日、ドイツ第一装甲集団の先鋒部隊は敵の部隊が少ないスター・ルイ・ブイホフ、シユクロフ、コブイシの3カ所からドニエプル河を渡つた。装甲部隊は要塞化されていたオルシャ、モギリヨフ、ロガチエフの脇をすり抜け、モスクワ街道上の2番目の都市スモレンスクへ突進した。

同じ頃、第3装甲集団の第20装甲師団（シユトウンプ中将）は西ドヴィナ河上流の交通の要衝、ヴィテブスクを占領した。狂信的な青年共産党員たちが街に火を放つたが、ホトの装甲部隊はそのまま東方へ進撃した。

ソ連軍の西ドヴィナ河とドニエプル河に沿つて構築された防衛線は次々と、各所で突破口が穿たれていつたのである。

2・突進（後書き）

(1) 「暫定司令官」 ハレメンコは、西部正面軍副司令官に降格された。

(2) 1941年5月から、第19～22軍は西ドヴィナ河＝ドニエプル河の防衛線に配置されていた。スターーリンが国境への配置を嫌つたためであり、正しく「功罪」である。

ドイツ第3装甲集団は7月10日の時点で、西ドヴィナ河の両岸に分離されていた。未だ西岸にいる第57装甲軍団は、はるか北方のヴェリキエ・ルーキを占領するよう、中央軍集団司令部から命じられていた。

そこで、ホトはヴィデブスクを占領した第39装甲軍団をスマレンスクの背後に突進させ、ドニエプル河の南から進撃してくるはずの第2装甲集団とスマレンスク東方で連結し、ミンスクと同様の包囲を完成させるという作戦計画を立てた。

このホトの構想は、「バルバロツサ作戦」の第1目標である「白ロシアとドニエプル河以西のウクライナでのソ連軍の殲滅」に基づいたものであつたが、グテーリアンとの見解の相違によつてその収穫を半減させられてしまうのである。

7月11日、第39装甲軍団はソ連第19軍（コーネフ中将）がヴィデブスク正面に構築した薄い防衛線を突破すると、スマレンスク北方を東へと突進した。装甲部隊の先鋒を務める第七装甲師団（フンク少将）は15日、ドニエプル河付近のヤルツェヴォを占領して、スマレンスク＝モスクワ間の自動車道路と鉄道を切断した。

一方、グテーリアンは手持ちの3個装甲軍団（北から第47・第46・第24）をすべてドニエプル河の東岸に進出させた上で、スマレンスクからはるか東方のエリニヤとドロゴブジを占領するよう命じた。この2つの街はドニエプル河の重要な渡河点であり、「赤い首都」モスクワの占領には当然の布石であった。

7月13日、第46装甲軍団はモギリヨフ北方を通過し、南方では第24装甲軍団はスターイ・ブイホフからドニエプル河を渡つた。ソ連第13軍（ゲラシメンコ中将）の第61狙撃軍団（バクーニン少将）と第20機械化軍団（ニキティン少将）がモギリヨフで包囲されてしまい、その後2週間にわたつて抵抗したが、壊滅して

しました。

この日の夕刻には、ドイツ第47装甲軍団の第29自動車化歩兵師団（ボルテンシュテルン中将）はスマレンスクまであと11マイルの地点に到達した。14日、グデーリアンは大々的に部隊を再編して、第29自動車化歩兵師団に第18装甲師団を支援につけてスマレンスクに向かうよう命じた。

スマレンスクはモスクワ街道上で2番目に大きな都市である。この街の防衛には、第16軍（ルーキン中将）が担当することになった。市の防衛司令官は西部正面軍司令部から「徹底抗戦」の命令を受けていた。街路にはバリケードや大小のトーチカが築かれ、労働者は武装し、警察や民兵と一緒に市街戦グループに編入された。

市街戦は15日の朝7時に始まり、NKVDや民兵は銃・手榴弾・火炎瓶などで、悪鬼のように闘つた。ドイツ軍の歩兵は重砲や火炎放射器で、家を一軒一軒奪つていく他なかつた。スターリングラードを彷彿させる壮絶な市街戦の後、16日の夜に市のほぼ全域を占領された。

スマレンスクとその西方で防御戦を続けるソ連3個軍（第16・第19・第20軍）は新たなる包囲網に閉じ込められる危機に直面したが、グデーリアンは東方へ進撃する当初の方針を変えなかつた。すなわち、第46装甲軍団の第10装甲師団（シャルル中将）とSS自動車化歩兵師団「帝国」（ハウサー中将）を第3装甲集団が占領したヤルツェヴォではなく、エリニヤヒドゴロブジに差し向けるのである。

7月10日、ドイツ中央軍集団がドニエプル河を押し渡った頃、モスクワではクレムリンの戦時指揮本部として「最高司令部」が設立された（一）。「最高司令部」の議長スター・リンはドニエプル河の突破とスマレンスクの陥落を受けて、ティモションコに情勢を転回させよと厳命した。

グデーリアンが東方のエリニヤヒドロロブジに装甲部隊を送つたことにより、スマレンスクとヤルツェヴォの間には幅50キロの「回廊」が開いていた。ティモションコはこの「回廊」を使って包囲されつつある3個軍を救出しようと考へ、17日付けで南西部正面軍に所属していたロコソフスキイは西部正面軍へ転属を命じた。

ロコソフスキイは「回廊」を保持するために、ヤルツェヴォ付近のドイツ第3装甲集団を攻撃せよと命じられた。彼は第38狙撃師団（キリロフ大佐）と第101戦車師団（ミハイロフ大佐）を与えられ、その支援に敗れた各部隊の残兵をかき集めて即席の機動集団を編成した。

7月20日、ドイツ空軍からの間断ない空爆にも関わらず、ロコソフスキイの寄せ集め部隊はヤルツェヴォの奪還を開始した。24日までドイツ第7装甲師団の攻撃を食い止め、25日には反撃に出た。思わぬ反撃に遭遇したドイツ軍は市を放棄して北方へ撤退せざるを得なくなつた。

この成功に気を良くしたティモションコは、西部正面軍の後方に配置された予備正面軍（第24・第28・第29・第30・第31・第32軍）の中に多数の機動集団を編成して、スマレンスク周辺で突出部を形成するドイツ中央軍集団のほぼ全周で反撃を命じた（2）。

7月24日から、大急ぎで行われたこのソ連軍の反撃は、広がりすぎたドイツ装甲部隊に絶え間なく圧迫を与えたことにより、大き

な損害を生じさせることになった。だが最後には、ソ連軍の協同と支援砲撃の失敗、資材不足などにより、攻撃は失敗に終わった。

7月24日、「最高司令部」は西部正面軍の担当正面を縮小させるために、南翼に中央正面軍を設立した。西部正面軍の第13・第21軍が移され、司令官にはクズネツォーフ大将が任命された。これでスモレンスクの奪回に専念できるようになつた西部正面軍司令部は第16軍と第20軍に対し、スモレンスクの奪回を命じた。

7月27日、第16軍はスモレンスクの停車場を奪回し、街の南部に向かつて進撃を続けた。しかしその間に、迂回していたドイツ第39・第47装甲軍団はスモレンスク東方で合流を果たしていた。包囲網に再び、3個軍（第16・第19・第20軍）が拘束された。7月29日、第3装甲集団の第20自動車化歩兵師団（ツォーン少将）と第2装甲集団の第17装甲師団（トーマ中将）が、スモレンスクとドロゴブジのほぼ中間地点でようやく連結した。ティモシエンコは包囲された10個師団に東方への脱出を命じたが、8月4日までに多くの部隊は壊滅した。

7月31日、第24装甲軍団はソ連予備正面軍の攻撃を撃退し、数日以内にこれを壊滅させた。こうしてドイツ軍に、東方もしくはキエフ防衛中のソ連南西部正面軍北翼への作戦の道が開けたのである。

8月5日、ドイツは「スモレンスク会戦」の終結を公式に発表した。この戦いでソ連軍は参加兵力の半数を超える約34万人を失い、1348両の戦車と自走砲、9290門の火砲を破壊または鹵獲された。

だが、結果的には失敗に終わつてしまつたソ連軍の反撃はヒトラーに思わぬ憶測を抱かせることには成功した。特に第2装甲集団の南翼に対して行われた一連の反撃を重大な脅威とみなしたヒトラーは、「バルバロッサ作戦」の第2段階 攻撃の主軸を中央部から外すことを考え始めたのである。

4・波状反撃（後書き）

（1）詳しく述べは後述する。

（2）これらの部隊の中には、NKVDの所属要員によつて編成された師団が含まれていた。当時の補充要員よりも、戦術・規律ともに優秀ではあった。

1・攻撃再開

ドイツ北方軍集団は6月28日、第4装甲集団の装甲部隊が西ドヴィナ河に2つの橋頭堡 ドヴィンスクとヤロブシコタツトを確保したことにより、レニングラード攻略の第1段階を達成していた。しかし、第4装甲集団司令官ヘーブナー上級大将は29日、装甲部隊にさらなる東進ではなく、進撃の一時停止と現状維持を命じた。援護のための歩兵部隊と燃料補給のトラックを待つためであった。一方、ドヴィンスクを占領されたことにより、ソ連北西部正面軍司令官クズネツォーフ大将は参謀長と共に30日付けて解任された（）。後任には、配下の第8軍司令官ソベンニコフ中将が昇格する形で就任した。その背後では、北部正面軍（レニングラード軍管区から改組）の各部隊が、レニングラードを防衛する準備を着々と進めていた。

7月2日、第16軍の第121歩兵師団（ランケーレ少将）が西ドヴィナ河に到達することを受け、ヘーブナーはレニングラードへの攻撃を再開するよう配下の装甲部隊に命令した。

このとき、ヘーブナーは第41装甲軍団をドヴィンスクからレングラーードを最短距離で通じる街道上に直進するよう命じた。当然、待ち構えていると予想されるソ連軍の大兵力を牽制しながら、ペイプス湖に流れるヴェリカヤ河をプスコフとオストロフで渡河する事が目標とされた。一方、第56装甲軍団は第41装甲軍団の南翼敵の防備が脆弱と思われる側面を援護しつつ、敵の背後に突進させる。最初の目標は、セベジとオポチカの占領であった。

7月4日、第41装甲軍団の第1装甲師団（キルヒナー中将）は南部からオストロフの市街地に突入し、ヴェリカヤ河に橋頭堡を確保することに成功した。その南東30キロの地点からは、第6装甲師団（ラングラー少将）がプスコフへの進撃を開始した。

ソベニコフは、交通の要衝であるオストロフに第3戦車師団

(アンドレー・エフ・大佐)を急きょ投入した。7月5日、ソ連軍の戦車部隊は1日遅れで、KV-1とKV-2を先頭に北部からオストロフの奪還に乗り出した。

第41装甲軍団は航空偵察で事前に把握していたとはいえ、ソ連軍の強力な重戦車による反撃を対戦車砲によって辛くも凌ぐ結果となつた。9日、第36自動車化歩兵師団(オットン・バッヒヤー中将)は激しい市街戦の末、プスクフを占領した。

この事態を受けて、ソ連北西部正面軍は各地で突破された。ヴェリカヤ河の防衛線を放棄して、ルガ河流域の新たな防衛線へ撤退した。ルガ河はレニングラードへの敵の進撃を食い止める最後の天然障害だった。この防衛線の構築には、約3万人のレニングラード市民が北部正面軍によって動員され、地雷の敷設、塹壕や対戦車壕作りに従事していた。

1・攻撃再開（後書き）

(一) クズネツォーフはその後7月24日、中央正面軍司令官に就任した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9472w/>

巨人たちの戦争 第2部：対立

2011年10月9日03時29分発行